

俳諧一茶集

後編

四

14

3157

30(9上)



一 女若き時一 八代徳の徳と古くは若れくも本まのり
くつ心地とくつ若き一 若くは徳の徳と一 女の自ひく
深まんせれ人そ悦く赤く人そ悦く一 女の自ひく
をさめて徳りとせれ一 若くは徳の徳と一 女の自ひく
有子一 若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 女の自ひく
甲のくつ一 若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 女の自ひく
何と一 若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 女の自ひく

一 若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 女の自ひく
又白ゆり物の足一 若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 女の自ひく
又白ゆり物の足一 若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 女の自ひく

又越今も自のうらうらかすく一 若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 女の自ひく
さきさき物と若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 女の自ひく
若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 女の自ひく

一 若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 女の自ひく
一 若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 女の自ひく
師の自もゆけさ女が若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 女の自ひく

何日本若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 女の自ひく
何日本若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 女の自ひく
何日本若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 女の自ひく
何日本若くは徳の徳と一 若くは徳の徳と一 女の自ひく

一 素之也新事少し朱玉外

一 此の翁曰く命一わたりてのまをたしめし一しりひのり

一 思ふにわたりたりし載一をのり

一 公著といひのり方此をたすのりいひのりいひのり

一 かしこく一をのり作てはきし一まよひといひのり

一 此のまよひといひ

一 六月也晴し一をのりいひのり

一 此の翁林令し一のりいひのり至るに一をのりいひのり

一 川風わたりす物まよひのりいひのり

一 此の翁いひのりいひのりいひのりいひのり

一 中在候し一中在候し一をのりいひのり

一 翁曰く一の翁つしけし一中在候し一をのりいひのり

いひのり長き候し一をのりいひのりいひのり

一 かく一をのりいひのりいひのりいひのり

一 此の翁曰く一の翁いひのりいひのりいひのり

一 一をのりいひのり

一 此の翁いひのりいひのりいひのり

一 此の翁曰く一の翁いひのりいひのりいひのり

一 一をのりいひのり

一 此の翁いひのりいひのりいひのり

一 此の翁曰く一の翁いひのりいひのりいひのり

一 一をのりいひのり

一 此の翁いひのりいひのりいひのり

一 一をのりいひのり

なうそめをてまゝにひのけしやとて老人の傍にすゝ
ま控へたるもていふは侍りたれなむとていふは
秋とてやとてつくとあやむの取

去芳とて白くハの極どりし星之侍りてそと初儀とあり
他りいふ思ひまひ侍りてやぶるしとていふは
瓜の字すといふは強行なるの取とていふは物と侍りて

鳥をいぬぬ貴とていふはとていふは
去芳とて白くハの極どりし星之侍りてそと初儀とあり
是初の字の位よりいふは完ぬまひとていふは
あやむといふはとていふは瓜の取

去芳とて白くハの極どりし星之侍りてそと初儀とあり
ていふはとていふはとていふは

一人ありては是陽一と秋のたれ

はそやゆくと人ありとあやむは

去芳とて白くハの極どりし星之侍りてそと初儀とあり
一何思とていふはとていふは

桐の本とて強行とていふは堀の内

去芳とて白くハの極どりし星之侍りてそと初儀とあり
ていふはとていふはとていふは

あやむといふはとていふは

去芳とて白くハの極どりし星之侍りてそと初儀とあり
た人ありとあやむとていふはとていふは
とていふはとていふはとていふは

作らるるものありては其の宗母第一の心にて存代をなすべし
一 其の宗母ハ尺牘作に属する定家卿の宗母トシテ并尊
此の宗母定家の宗母の宗母ハ本是尺牘作の宗母トモ
書きしなり

一 其の宗母ハ尺牘作に属する定家卿の宗母トシテ并尊
此の宗母定家の宗母の宗母ハ本是尺牘作の宗母トモ
書きしなり

一 其の宗母ハ尺牘作に属する定家卿の宗母トシテ并尊
此の宗母定家の宗母の宗母ハ本是尺牘作の宗母トモ
書きしなり

作らるるものありては其の宗母第一の心にて存代をなすべし
一 其の宗母ハ尺牘作に属する定家卿の宗母トシテ并尊
此の宗母定家の宗母の宗母ハ本是尺牘作の宗母トモ
書きしなり

一 其の宗母ハ尺牘作に属する定家卿の宗母トシテ并尊
此の宗母定家の宗母の宗母ハ本是尺牘作の宗母トモ
書きしなり

一 其の宗母ハ尺牘作に属する定家卿の宗母トシテ并尊
此の宗母定家の宗母の宗母ハ本是尺牘作の宗母トモ
書きしなり

一 其の宗母ハ尺牘作に属する定家卿の宗母トシテ并尊
此の宗母定家の宗母の宗母ハ本是尺牘作の宗母トモ
書きしなり

一 其の宗母ハ尺牘作に属する定家卿の宗母トシテ并尊
此の宗母定家の宗母の宗母ハ本是尺牘作の宗母トモ
書きしなり

此等之商人杜ふり白し以才之まん人ニききしひひかひ
 少日此等之付方所きくくくく報しは海屋にたひ
 ころのハ風狂の商人なるひひきたるなり 板物の地持に
 入て武若の命を以才之くくくく

一 かいなりハ杖つふ坂を以才
 角めくくくく牛とひひひ

此等商人去才の白し少日此等白くくくく書の地は
 くの服しそくくくくくくくくくくくくくくくくく
 中々のふくくくくくくくくくくくくくくくくく
 まくくくくくくくくくくくくくくくくく

一 去才之散白のくくくくくくくくくくくくくくくくく
 板花とくくくく山里ハ万葉本をくくくくくくくくくくくく

くのくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 千の信し菊く散白ハも命をまのくくくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 一 去才之菊白の物招の物才之の物白の物くくくくくくく
 るくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 命合すくくくくの古くくくくくくくくくくくくくくくく
 くのくくくくくく

一 菊白の方くくくく散白のくくくくくくくくくくくくく
 降くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一 去才之才の松手の物れくくくく去才本且く用くくくくく
 君の付くくくく菊白を去人の業くくくく編く及くくくくく

此人より先く... 其の平生... 一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の...

一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の...

一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の...

一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の...

一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の...

一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の...

一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の...

一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の...

一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の...

一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の...

一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の...

一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の...

一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の...

一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の...

一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の... 一云芳名... 其の...

一 或月次の法を以て其の門人の示すれ一とあり

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

その仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

仙伝あり一と一と更なる人甚仙伝を以て其の仙伝をいひ一と

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

一 去芳の菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

一 菊田仙伝を以て其の仙伝をいひ一と人あり一と其の仙伝の上を

他名の名大... 一

一箱日記書の物... 一

一古芳言箱... 一

一箱日記書の物... 一

一

一古芳言箱... 一

一古芳言箱... 一

一古芳言箱... 一

一 既なりて我輩ハ何事しんば人々何事しんば...
一 在今のありて吾人の死の事をも其の...
一 吾子等のうらまに幸ひ老人を射射の...
一 吾も老人を其地と古今傳授の人...
一 吾も老人を其地と古今傳授の人...
一 吾も老人を其地と古今傳授の人...

一 吾も老人を其地と古今傳授の人...
一 吾も老人を其地と古今傳授の人...
一 吾も老人を其地と古今傳授の人...
一 吾も老人を其地と古今傳授の人...
一 吾も老人を其地と古今傳授の人...
一 吾も老人を其地と古今傳授の人...
一 吾も老人を其地と古今傳授の人...
一 吾も老人を其地と古今傳授の人...
一 吾も老人を其地と古今傳授の人...
一 吾も老人を其地と古今傳授の人...

此の書は、佛の傳へたるものなり。其の旨は、
一 浪化の佛の傳へたるものなり。其の旨は、
二 亦中の佛の傳へたるものなり。其の旨は、
又 佛の傳へたるものなり。其の旨は、
三 佛の傳へたるものなり。其の旨は、
一 浪化の佛の傳へたるものなり。其の旨は、

浪化の佛の傳へたるものなり

一 浪化の佛の傳へたるものなり。其の旨は、
二 亦中の佛の傳へたるものなり。其の旨は、
又 佛の傳へたるものなり。其の旨は、
三 佛の傳へたるものなり。其の旨は、

浪化の佛の傳へたるものなり

浪化の佛の傳へたるものなり

一 浪化の佛の傳へたるものなり。其の旨は、
二 亦中の佛の傳へたるものなり。其の旨は、
又 佛の傳へたるものなり。其の旨は、
三 佛の傳へたるものなり。其の旨は、

浪化の佛の傳へたるものなり

一 浪化の佛の傳へたるものなり。其の旨は、
二 亦中の佛の傳へたるものなり。其の旨は、
又 佛の傳へたるものなり。其の旨は、
三 佛の傳へたるものなり。其の旨は、

一 浪化の佛の傳へたるものなり。其の旨は、
二 亦中の佛の傳へたるものなり。其の旨は、
又 佛の傳へたるものなり。其の旨は、
三 佛の傳へたるものなり。其の旨は、

おつれつて、校地のきつすゆきま
おとろくくさつて——

一浪化言篇むうし紀傳の山中を越りて對面する所の男それの
婦をわたりきつて後を新を下して坂中へ降りては信濃の女を
男の苦をよそひては女を苦くすむる事なくす
曰ふにゆりて人々を候てそとそとて男のこゝろは向の
山のわたりては女は又婦新をおひて妹とて言ひて其の時
下は女は苦れ六つて後信濃を信よか地の念とて外へ山中へ
候ては女を苦くすむる事なくすむる事なくすむる事なくす
ま——とては信濃の山に降りては信濃の山に降りては信濃の山に
女のわたりては女は又婦新をおひて妹とて言ひて其の時

傷くらあつたは——中し女の女——
妹背ハゆりては——

一浪化言篇むうし紀傳の山中を越りて對面する所の男それの
婦をわたりきつて後を新を下して坂中へ降りては信濃の女を
男の苦をよそひては女を苦くすむる事なくす
曰ふにゆりて人々を候てそとそとて男のこゝろは向の
山のわたりては女は又婦新をおひて妹とて言ひて其の時
下は女は苦れ六つて後信濃を信よか地の念とて外へ山中へ
候ては女を苦くすむる事なくすむる事なくすむる事なくす
ま——とては信濃の山に降りては信濃の山に降りては信濃の山に
女のわたりては女は又婦新をおひて妹とて言ひて其の時

とてなれぬはまゝのうきうきとてまじりて
風をよかぬて下されぬ色にけしき直にそれるよき中三つは
なほ

有るもふらぶお目へ一ふを志し本へ 風景
と句のゆへにせし人情まほのそとを以て
拾合さきう合を却しものぞ知し後代の人
は白くよき
後代の人け白くよき
後代の人け白くよき

とてなれぬはまゝのうきうきとてまじりて
風をよかぬて下されぬ色にけしき直にそれるよき中三つは
なほ

一支者まゝ向一々暗きとてしるはひて
雪の風と照らすとて一四の皂物とぬる一四の白衣とぬる
とてしるはひて雪の風と照らすとて一四の皂物とぬる一四の白衣とぬる
とてしるはひて雪の風と照らすとて一四の皂物とぬる一四の白衣とぬる

とてなれぬはまゝのうきうきとてまじりて
風をよかぬて下されぬ色にけしき直にそれるよき中三つは
なほ

一為造化の意初なるけしき研亭の風流と松月松陰ホウ月射の風流

高きる遊里戯坊の物すまふして風流の席とせむに於て
よまふに遊里の人々は初を感て夫よりして何のつらさ
をいふにゆゆと骨を致すことなれど信を以てて如故
号稱念のよに他人の心もいひてやめ誠とすむの如く
ゆゆと志しむるはたきひふまゝにさうしてれぬに於て
ゆゆと志しぬ州大垣の如く岸上の心念をわけてゆゆと
化をなれといつて其の如く遊里の世説を足るに甚詳に
かかるといふ言事多し

一編成時許を君しおき花をくの時中とし城とわたりき大
男はつて走つていふ本編自若としてさゆくに誠をうて云
を乞ふやうし布を一つもゆくとくしてゆゆと志すを
ゆゆの如く天根の如く志すゆゆと志すゆゆと志すゆゆと

高きる遊里戯坊の物すまふして風流の席とせむに於て
よまふに遊里の人々は初を感て夫よりして何のつらさ
をいふにゆゆと骨を致すことなれど信を以てて如故
号稱念のよに他人の心もいひてやめ誠とすむの如く
ゆゆと志しむるはたきひふまゝにさうしてれぬに於て
ゆゆと志しぬ州大垣の如く岸上の心念をわけてゆゆと
化をなれといつて其の如く遊里の世説を足るに甚詳に
かかるといふ言事多し

ゆゆと志しぬ州大垣の如く岸上の心念をわけてゆゆと

取らざる位に人集りていふ事とては内蔵中の修業に
槍子利者臨みしうし一編のいふ事とては内蔵中の修業に
疾ひぬと云ふ事とては内蔵中の修業に
いふ事とては内蔵中の修業に
外に一是に其のいふ事とては内蔵中の修業に
を破る事とては内蔵中の修業に
体と云ふ事とては内蔵中の修業に
す。雲と云ふ事とては内蔵中の修業に
禱と云ふ事とては内蔵中の修業に
主と云ふ事とては内蔵中の修業に
是と云ふ事とては内蔵中の修業に
其の勝をくるといふ事とては内蔵中の修業に

此法例として高きくひらきとては内蔵中の修業に
す。雲と云ふ事とては内蔵中の修業に
いふ事とては内蔵中の修業に
れと云ふ事とては内蔵中の修業に
信と云ふ事とては内蔵中の修業に
ぬと云ふ事とては内蔵中の修業に
佛と云ふ事とては内蔵中の修業に
岸止の礼とては内蔵中の修業に
紙張の法とては内蔵中の修業に
いふ事とては内蔵中の修業に
す。雲と云ふ事とては内蔵中の修業に
く持向う事とては内蔵中の修業に

一 支考言の物に依りて三河の新城と云ふ

角 亦 變れ ぬく べし といふ

と不花赤子人々集り入るるを赤子河津といふ也
江の古山をこるるかゝるくろの危疾つらう赤子河津のさし
とを初これに中を八翁八翁のつらひあふる編譯の為誠は
うそやゆらう赤子河津をいふは誤り也
誠の二用も亦事。こそれをもかゝるるや

又志上 抄子のさしを初赤子

と千句をその中にさしてかゝるる赤子河津といふは付を辨
て能はれぬ赤子河津の人をいふはさしをいふはさしをいふ
とやとて校ハサとていひていふは初赤子河津の二集
アゆらう赤子の付合をいふはさしをいふはさしをいふはさし

なすのりをも中い箱目赤と能はれぬ
ん的とれぬ付合をもいふはさしをいふはさしをいふはさし
それを随類の海といひて標録の対ふは決して知る
しとてはさし

一 支考言の物に依りて三河の新城と云ふ
管のさしを初赤子河津をいふはさしをいふはさし

言ひさし や竹の子 藪子 志を

さしめしん や竹の子 藪子 志を

抄の二句を初赤子河津をいふはさしをいふはさしをいふはさし
情をいひていふはさしをいふはさしをいふはさしをいふはさし
とてはさしをいふはさしをいふはさしをいふはさしをいふはさし
るさしをいふはさしをいふはさしをいふはさしをいふはさし

とらふくたのすけはこけりふば毎々表急好守也

一 次郎 系手作のすけは約丈子乙お正妻は本町をくわく守り
甚し好休の所は河沙好く趣意の幸あり約次郎系手天満三精
屋に勤つた辰美番急又く五條米を斗割油二升塩一升味噌
三升薪廿束炭廿束月雜紙三束しり口沙合し強引の味
麵二升若し秋中やりに五十度子あり

ふらふき信時きこけり約の合氣麵三若茶飯ともすし
給ひの志をしく膳帳しりまの目是よりすまをくむて先
の膳帳の方よし強し室作りし大舟川のたりきり句

大堰川波り 嘉永 文の目

此のより多きことあり大舟川のたりしりまの目是よりすまをくむて先
の膳帳の方よし強し室作りし大舟川のたりきり句

清流や波り 文の目

とけりしり柄の變りしりまの目是よりすまをくむて先
の膳帳の方よし強し室作りし大舟川のたりきり句

あれ大堰川のり 文の目

とけりしり柄の變りしりまの目是よりすまをくむて先
の膳帳の方よし強し室作りし大舟川のたりきり句

殊に主命の功の^一を^二おさねり^三る^四は^五心^六を^七度^八大^九切^十なる^{十一}事^{十二}
 沙汰の^一ま^二り^三て^四は^五心^六を^七度^八大^九切^十なる^{十一}事^{十二}
 六百千^一波^二なる^三
 一^一然^二る^三に^四は^五法^六子^七の^八心^九を^十度^{十一}大^{十二}切^{十三}なる^{十四}事^{十五}
 自^一ら^二の^三垢^四付^五く^六不^七淨^八の^九心^十を^{十一}度^{十二}大^{十三}切^{十四}なる^{十五}事^{十六}
 中^一の^二友^三ら^四め^五て^六一^七く^八付^九す^十鬼^{十一}衆^{十二}と^{十三}ん^{十四}の^{十五}受^{十六}生^{十七}の^{十八}
 不^一淨^二の^三心^四を^五度^六大^七切^八なる^九事^十
 唐^一舟^二子^三と^四ん^五の^六心^七を^八度^九大^十切^{十一}なる^{十二}事^{十三}
 殊^一に^二主^三命^四の^五功^六の^七心^八を^九度^十大^{十一}切^{十二}なる^{十三}事^{十四}
 殊^一に^二主^三命^四の^五功^六の^七心^八を^九度^十大^{十一}切^{十二}なる^{十三}事^{十四}

一^一殊^二に^三主^四命^五の^六功^七の^八心^九を^十度^{十一}大^{十二}切^{十三}なる^{十四}事^{十五}
 殊^一に^二主^三命^四の^五功^六の^七心^八を^九度^十大^{十一}切^{十二}なる^{十三}事^{十四}
 殊^一に^二主^三命^四の^五功^六の^七心^八を^九度^十大^{十一}切^{十二}なる^{十三}事^{十四}
 殊^一に^二主^三命^四の^五功^六の^七心^八を^九度^十大^{十一}切^{十二}なる^{十三}事^{十四}
 殊^一に^二主^三命^四の^五功^六の^七心^八を^九度^十大^{十一}切^{十二}なる^{十三}事^{十四}
 殊^一に^二主^三命^四の^五功^六の^七心^八を^九度^十大^{十一}切^{十二}なる^{十三}事^{十四}
 殊^一に^二主^三命^四の^五功^六の^七心^八を^九度^十大^{十一}切^{十二}なる^{十三}事^{十四}
 殊^一に^二主^三命^四の^五功^六の^七心^八を^九度^十大^{十一}切^{十二}なる^{十三}事^{十四}
 殊^一に^二主^三命^四の^五功^六の^七心^八を^九度^十大^{十一}切^{十二}なる^{十三}事^{十四}
 殊^一に^二主^三命^四の^五功^六の^七心^八を^九度^十大^{十一}切^{十二}なる^{十三}事^{十四}

一入りやいふなりお言ひし言ひししては見えぬよとてお尋し木
目には白き雲の影をのりてはる子おたよりを食ふゆをすすめあふれ
れしすなみぬらぬ梨実をてやいふ木目かかく木目かかく
志きりしはやみぬらぬ影をのりてはる子おたよりを食ふゆを
すすめあふれ
ゆふ木目かかく木目かかくふ外 死ぬらうとてはししして申のい
別とていふ人かたけけのいふる二人の命いふるのい

一惟然とては十一百おたよりしてはる子おたよりを食ふゆをすすめあふれ
ゆふ木目かかく木目かかくふ外 死ぬらうとてはししして申のい
別とていふ人かたけけのいふる二人の命いふるのい
ゆふ木目かかく木目かかくふ外 死ぬらうとてはししして申のい
別とていふ人かたけけのいふる二人の命いふるのい

ゆふ木目かかく木目かかくふ外 死ぬらうとてはししして申のい
別とていふ人かたけけのいふる二人の命いふるのい
ゆふ木目かかく木目かかくふ外 死ぬらうとてはししして申のい
別とていふ人かたけけのいふる二人の命いふるのい

ゆふ木目かかく木目かかくふ外 死ぬらうとてはししして申のい
別とていふ人かたけけのいふる二人の命いふるのい
ゆふ木目かかく木目かかくふ外 死ぬらうとてはししして申のい
別とていふ人かたけけのいふる二人の命いふるのい

文華 其用 去来 李由 曲翠 正秀 木節 七州
 臥高 惟妙 昌房 探芝 沈足 之道 芝柏 北也
 尚白 去芳 卓袋 許六 丹野 風國 野童 游力
 野明 角上 胡故 蘇葉 靈椿 素蟬 四鳥 萬里
 識く 這萃 荒雀 楚江 木枝 扑吹 魚光 支考

徳代名不記

右の近江の玉中ハヤシ及び、事名坂丹波尾張位者等外見
 多岐ノ上ノ下ノ人々ノ名ノ人々ニ其徳道ノ記モトルノ事モ
 此ノ中ノ香ノ白ノ名ノ人々ノ名ノ人々ニ其徳道ノ記モトルノ事モ
 此ノ中ノ香ノ白ノ名ノ人々ノ名ノ人々ニ其徳道ノ記モトルノ事モ
 此ノ中ノ香ノ白ノ名ノ人々ノ名ノ人々ニ其徳道ノ記モトルノ事モ
 此ノ中ノ香ノ白ノ名ノ人々ノ名ノ人々ニ其徳道ノ記モトルノ事モ

福ノミト書ノ節ノ通ノ本名ノ右ノ方ノ徳道ノ記モトルノ事モ
 十五ノ本名ノ節ノ通ノ本名ノ右ノ方ノ徳道ノ記モトルノ事モ
 十五ノ本名ノ節ノ通ノ本名ノ右ノ方ノ徳道ノ記モトルノ事モ
 十五ノ本名ノ節ノ通ノ本名ノ右ノ方ノ徳道ノ記モトルノ事モ
 十五ノ本名ノ節ノ通ノ本名ノ右ノ方ノ徳道ノ記モトルノ事モ
 十五ノ本名ノ節ノ通ノ本名ノ右ノ方ノ徳道ノ記モトルノ事モ

佛遺物

山佛一經 伊米一寸一分

略註五經字引	一冊	篆書字引	一冊	易學小筌	一冊
書家必用	一冊	書家錦囊	一冊	書家便覽	一冊
古韻通叶	一折	醫書之部			
痘疹戒草	三冊	治痘要方	一冊	治痘要方補遺	一冊
治痘要訣	一冊	痘疹養生訣	一冊	痘瘡食物考	一折
保嬰須知	二冊	續痘科辨要	三冊	種痘辨義	一冊
雜書之部		方函	二冊	日養食鑑	一冊

三省錄	五冊	世事百談	四冊	瓦礫雜考	二冊
東江倉百首	一冊	子昂真草千字文		子昂龍興寺碑	
隸書醉翁亭記		蘭竹畫譜	二冊	竹沙小品	一帖
光琳百圖	二冊	光琳百圖 <small>後編</small>	二冊	光琳百圖 <small>後編</small>	二冊
畫圖撰要	三冊	一蝶畫譜	三冊	蕙齋略畫	二冊
刀釵圖考	一冊	刀釵圖考 <small>二篇</small>	一冊	裝劍備考	一冊
鞞鏡圖式	一冊	甲冑着用辨	二冊	貞丈家訓	一冊
田如調法記	二冊	百姓袋	一冊	按心方圖鑑	一冊

珍錢奇品圖錄 一冊

古錢鑑 一冊

佛鬼軍一休 一冊

又更一心記 一冊

日蓮御一代記 一冊

善惡種持秘譜

八部拔講釋 一冊

曆日講叙 一冊

將棊圖式 一冊

歌書之部

貫之集類題 二冊

香川景桐集 桂の落葉 二冊

海野遊翁詠 柳園家集 二冊

千町拔穂 一冊

園圃拔菜 二冊

萬葉用字格 一冊

靈能一貫 二冊

源氏物語系圖一折

手柄岡持狂歌狂文 家おん 一冊

蜀山百首 一冊

仮名類纂 一冊

竹村茂枝集 穗向屋集 三冊

俳諧之部

俳諧故人五百題 二冊

續故人五百題 二冊

掌中故人五百題 一冊

新五百題 二冊

新々五百題 二冊

嘉永五百題 二冊

今人五百題 二冊

續今人五百題 二冊

三篇 今人五百題 四冊

近世五百題 二冊

白雄坊五百題 二冊

過庵撰 今人百家類題 二冊

過庵撰 近世十家類題 二冊

名所千題集 三冊

題林發句集 四冊

廿萬發句集 四冊

乙二七部集 二冊

曉臺七部集 二冊

今七部集 二冊

嵐雪句集 二冊

發句類聚 二冊

御成敗式目	一冊	女今川	一冊	女雅俗要文	一冊
千字文	一冊	消息詞	一冊	庭梅帖	一冊
梅澤先生手本向	一冊	庭訓往來	一冊	風月往來	一冊
風俗文選拾遺	二冊	安政五百題	二冊	類題金玉集	四冊
俳諧四季草	四冊	一葉集	後篇 四冊	俳諧集草	十六篇
一葉集	芭蕉翁 一代集 五冊	饒舌錄	二冊	名家類題	四冊
俳諧寐癡	二冊	蒼虬翁句集	二冊	今人發句集	二冊
叢句古今撰	二冊	過日庵輯			

新三十六歌仙	一帖	雪後帖	石摺 一帖	新撰詩歌合	一冊
續撰朗詠集	二冊	實語教童子教	一冊		
諸流手本向					
尊圓古今序	一帖	同真名序	一帖	尊朝瀟湘景	一冊
大橋庭訓往來	一冊	大橋新年帖	一冊	橘敬庭訓	一冊
正敬商賈往來	一冊	蓮池堂法帖	一帖	瀧本芳野道の記	一冊
瀧本鴻書帖	一冊	雜書并繪人物之部			
		曲亭馬琴案文	雅俗要文	一冊	
				十返舎一九案文	諸國書狀指
				一冊	

教訓圖會 <small>前後</small>	二冊	皇朝三字經	一冊	繪本國恩俚談	一冊
大學笑句	一冊	裁縫早手引	一冊	米錢胸算用	一冊
每朝神拜小言	一折	<small>式亭三馬作</small> 小野馬鹿村	一冊	<small>十返舎一九作</small> 附會案文	一冊
<small>山東京傳作</small> 滑稽文選	一冊	安見道中記	一冊	唐名所の繪	一册
甲越勇士鑑 <small>前後</small>	二冊	諸職雛形	一冊	花鶴百人一首	一冊
女大學玉文庫	一冊	女庭訓往來	一冊		



天下 登龍丸

食物一切 一色代百文 一巡代六百文

此登龍丸、天下一方我家の秘法にて痰咳喘飲一通りの妙薬あり存云、十年廿年痰咳にて込上胸痛を立居成がごとく又喘飲を立居成がごとく胸痛夜も寐も成らざるも持て症を治すに此丸を治す、咳を止め喘飲、胸を開き病全くと云ふ、此丸は是より因てん氣の疲れを補ひ氣血を巡り脾胃を調へ氣力を保し考を立云舌とやのよ、其考を考へし、此丸

東叡山御書物所

江戸下谷御成道
青雲堂英文藏製

大坂 大坂 大坂	江戸 江戸 江戸	遠州 遠州 遠州	尾 尾 尾	越 越 越	下 下 下	本 本 本	後 後 後	如 如 如	聖 聖 聖
出 出 出	江 江 江	浦 浦 浦	永 永 永	保 保 保	天 天 天	正 正 正	須 須 須	久 久 久	八 八 八
同 同 同	同 同 同	同 同 同	上 上 上	上 上 上	下 下 下	下 下 下	下 下 下	同 同 同	甲 甲 甲
候 候 候	高 高 高	小 小 小	沢 沢 沢	繪 繪 繪	土 土 土	金 金 金	扇 扇 扇	小 小 小	村 村 村
八 八 八	四 四 四	郎 郎 郎	翁 翁 翁	翁 翁 翁	翁 翁 翁	翁 翁 翁	翁 翁 翁	翁 翁 翁	翁 翁 翁



